看護管理者に勇気をくれる医療経営学のテキスト

服部満生子　河北総合病院ナーシングディレクター

転換期に求められる看護管理者の役割

日本の医療は，大きな転換期を迎えている。そうした転換期で浮かび上がる問題は何か，果たして医療はどこへ向かうのか？

著者は「はじめに」で，主たる読者に現職の看護管理者を想定した，と述べている。そうした視点から書かれた本書は，看護管理者にとって，医療経営の問題となるエビデンスから看護職の果たすべき役割まで，身近なものとして捉えることができる。また，本書に書かれている看護職に課せられた重要な役割に改めて身が引き締まる思いもする。

実際のところ，医療現場でマネジメントに従事する看護管理者は，もはや看護部内の組織運営のみに翻弄されているわけにはいかない。看護要員配置が診療報酬に組み込まれたことで，病院運営の鍵を握るようになったからだ。いまの看護管理者たちは，7対1看護体制の確保と質の高い医療サービスの提供をめざし，計算機を片手に戦略を立て，パワーを発揮している。私の知る限り転換期に立つ看護管理者たちは決してへこたれてはいない。

とはいえ，病院職員全体の4～5割を占める看護職員を抱えながら病院の運営に参画することは容易ではない。時には予想できなかった出来事に遭遇し，勘や経験での対処に限界を感じることもある。

近未来の医療サービスへの処方箋

この本は3部から構成され，そのうち第2部には「医療経営学入門」「経営戦略と医療分野への応用」「経営組織論と医療分野への応用」と3つの章が立てられている。読者はそれぞれのレベルによって興味のあるところから読み進めることができる。

ちなみに，この種の本を読むときの私の癖は，後ろから読むことである。今回も「まとめ」にあたる第3部の「今後の展望：看護への期待」から読み始め，自らのこれまでの取り組みを振り返りながら，看護の将来について考えてみた。

ここで著者は医療サービスのあり方が，「労働節約的」な方式から「労働集約的」な方式へと大きく変わろうとしており，7対1看護ですら通過点に過ぎないと説く。諸外国に比べ看護師配置が極めて少ない日本の現状を鑑みれば必然かもしれない。

「マグネットホスピタル」や「顧客満足（CS）」「従業員満足（ES）」といったテーマは，近い未来に望まれる医療サービスへの取り組みの処方箋となりえよう。

さらには，第2部の後半で取り上げられている熊本医療圏とピュア・サポートグループの事例は，興味深かった。医療経営の実際は複雑であり，戦略と組織の相互作用からなるものである。必ずしも2つの成功例のように，うまくいくものではないことを念頭に置くことも必要であろうが，何よりこの本からは勇気をもらえる。手元にいつも置き，日常の看護管理の視野を広げるテキストとなる一冊である。

看護管理者のための医療経営学
医療制度と経営理論を理解し組織運営に活かす

尾形裕也　著
定価2310円
（本体2200円＋税5％）
日本看護協会出版会
TEL. 03-5778-5640

BOOK

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2009

0917-1355/09/¥250/論文/JCOPY

2026/09/17 17:07:39